



図4 試料A (上段) および試料C (下段) の焼鈍による各ピーク強度の変化

はさほど大きくない。したがって、格子間原子-Co 集合体が解離するならば、試料Aと試料CでIピークの減少の速度はあまり変わらないはずである。以上の点からVピークの減少機構としては、前記i)の機構がより確からしいと思われる。

総 論

あらかじめ急冷して空孔を導入した試料を電子線照射することによって次の結果が得られた。

- 1) 急冷実験では得られなかった新しい空孔-Co 集合体を見出した。この集合体は少数個の空孔とCo が結合したものである。
- 2) 150 K ~ 175 K の温度範囲で、空孔が移動することの直接的な証拠が得られた。これは、回復過程の「空孔モデル」⁶⁾ を支持するものである。
- 3) 空孔-Co 間の相互作用は必ずしも大きくなく、消滅場所の多い場合には解離しやすいことが示された。

(1981年2月9日受理)

文 献

- 1) 佐々絨一, 後藤 博, 石田洋一, 加藤正夫, Scripta Met., 11 (1977) 1029
- 2) 佐々絨一, 後藤 博, 石田洋一, J. Physique, C2-559 (1979)
- 3) 佐々絨一, 博士論文 (1979) 東京大学
- 4) W. Mansel, G. Vogl, J. Phys. F7 (1977) 253
- 5) G. Vogl, W. Mansel, W. Vogl, Fundamental Aspects of Radiation Damage in Metals, ed. by M. T. Robinson and F. W. Young (1975) 349
- 6) W. Mansel, H. Meyer, G. Vogl, Radi. Effects, 35 (1978) 69
- 7) K. Furukawa, J. Takamura, N. Kuwana, R. Tahara and M. Abe, J. Phys. Soc. Japan, 41 (1976) 1584
- 8) W. Schilling, J. Phys., F 3 (1973) 322

正 誤 表

(55年11月号)

頁	段	種 別	正
523	右	図7の横軸と縦軸の ネームを入れ替える	縦軸 加工速度 (mg/min) 横軸 加工面あらさ ($\mu\text{m}R\text{max}$)